

第5章

医療界に孤高の闘い^{いど}を挑むテス・ローリー博士

—コロナ騒ぎの謎解きは、イベルメクチン圧殺の謎解きに等しい



元WHOコンサルタント、テス・ローリー博士がイベルメクチン圧殺の背景を暴露

7月12日のX投稿でイベルメクチンの生みの親、大村智先生の米寿のお祝いを述べ、
2023年7月29日に「世界イベルメクチン・デー」を開催することを告知している

https://twitter.com/lawrie_dr/status/1679178265821429784

先日（二〇二三年二月三日）、やっと高橋徳『ワクチン後遺症』出版記念講演会を終えることができました。私に与えられたテーマは「コロナ、ワクチン、ウクライナを貫くもの」でした。講演時間として120分を予定されていました。

が、始まる直前になって徳先生から「定員400人を超える参加希望者がいて、まだ受付が終わっていないひとがいるので、開始を10分だけ遅らせてほしい」「しかし後のスケジュールも混んでいるので予定どおり12時に終えてほしい」と要請されました。

とはいえ、語りたいこと見せたい資料が山積していたので、1週間近くもかけて「それをどんな順で見せるか」「700枚以上の画像資料を120分で見せるために、そのうちの何を削り、何枚に縮めるか」という作業に、連日、取り組んできていました。

講演当日も午前1時に起きて、家を出る直前（7時半）まで試行錯誤を繰り返して、やっと339枚にまで縮めることができ、やっと2時間ギリギリで見せたい資料をほぼ見せることができる見出しが出てきて、ホッとしていたところに、上記の要請です。

一瞬パニックに陥りました。120分の時間で339枚ですから、単純計算すると1分

間に約3枚です。10分と言えば30枚近く削らなければなりません。あるいは画像1枚にかける説明時間を短縮しなければ、すべての資料を見せることができません。

見せたい資料には静止画だけではなく動画も含まれていますから、なおさら「10分短縮」という作業は困難を極めます。当初は、339枚に縮めたけれど、どうしても見せたい資料が3枚ばかり残っていましたから、うまくいけばそれも見せられるかも知れないと思っていただけに、徳先生の要請は、私や助手としてきていた連れあいをパニックに陥れるに十分でした。

2

しかし無碍むげに断るわけにはいかず、「分かりました」と言わざるを得ませんでした。

ですから、講演を始めたのはよいが気ばかり焦って、ひたすら画像資料のコマを進めることばかりに精神を集中させることになり、自分としては非常に不満の残る講演になってしまいました。

しかも午後になってみると、講演者はおしなべて平気で講演時間を延長するのですから、

私としては心穏やかならざるものがありました。こんなことくらいなら「はい、分かりました」と言っておいて、予定どおり「120分」の講演にすればよかったのにと悔やまれてなりませんでした。まさに「正直者は馬鹿を見る」の典型でした。

とはいえ、夕食懇親会の席上で「先生の講演が一番良かった」「あの資料では2時間では無理で、5時まですべて先生の時間でもよかったですくらいだ。それくらい映像資料が素晴らしかった」と言ってくれたひとが何人もいたので、やっと救われた気がしました。

もうひとつ救われたのは、講演会チラシを知人に大量に配布していただいた岐阜市議会の小山議員（仮名）からは、「非常に勉強になりました。先生の話が、具体的に、科学的で、いちばん良かったです」「私は、ただ今、三月市議会、四月の市議会議員選挙に向けて、ラストパートしています。市民の皆さんに、ウクライナやウクチンの真実を伝える勇気を持っていかねばと思います」というメールをいただいたことです。

小山議員は立憲民主党に属しているのですが、ウクチンの危険性やウクライナの実状を話す「陰謀論者」のレッテルを貼られて党内でも孤立しかねない雰囲気だそうですが、この自分としては不満の残る講演でも、小山議員に少しでも元気と勇気を与えたのであれ

ば、こんなに嬉しいことはありませんでした。そういう意味では小山議員のメールこそ、私にとっては元気の素になりました。

3

前おきが長くなりましたが、上のような理由で、当日、語りきれなかった点をいくつか取りあげて補足的説明をしたいと思います。

私は当初はウクライナ問題から講演を始めるつもりで構想を立てていました。というのはコロナは終息し始めていましたし、他方でウクライナ問題はドンバス地区で戦闘が燃えさかっていたからです。

そして不思議なことに、ウクライナ軍が勝利しているという報道が溢れているときは「コロナ騒ぎ」の報道は影を潜め、ロシア軍が優勢なときには「コロナによる感染者が再び広がっている」という報道がメディアを賑わす、ということが繰り返かえされてきました。

ですから、いま、ウクライナで戦闘が燃えさかっている最中であり、「ロシア軍」侵略者、プーチン「独裁者」という図式を、大手メディアが書きたてている時だからこそ、まずウクライナ問題から話し始めるべきではないかと考えたのです。

しかし日課にしている「1日2回、合計1万歩」の散歩をしている途中で、ふと気が変わりました。「講演参加者の多くは、ウクライナ問題よりもコロナ感染やワクチン後遺症に関心をもっているのではないか」と思い当たったのです。

アメリカの世論調査でも、「バイデン政権は、私たちの税金を湯水のごとくウクライナに注ぎ込んでいるが、苦しくなる一方の私たちの生活には関心を示してくれていない」という不満が日増しに強くなっていたからです。

とりわけバイデン大統領は、オハイオ州で列車が脱線し強烈な猛毒ガスが漏れ出る事件が発生していたにもかかわらず、現場に駆けつけるのではなく、キエフに出かけるという道を選んだのですから、アメリカ国民の怒りは高まる一方でした。

* Biden says he won't visit Ohio town hit by toxic spill (バイデンは猛毒ガス漏れのオハイオに行かない)
<https://www.rtl.com/news/572044-biden-wont-visit-ohio/> 25 Feb. 2023

日本でも事情は同じで、「コロナ騒ぎ」で国民の生活は苦しくなる一方なのに、岸田政権はアメリカの言いなりで、「中国・ロシア包囲網」を強化するための高価な武器を、アメリカから大量購入し、その費用をまかなうために増税する方向の政策を推進しているからです。

その一方で、今までは「新型コロナウイルス」を2類から5類へと格下げする政策には乗り気ではなく、児童にまでワクチンを打たせることばかりに熱心でした。これでは国民の不満や怒りは高まる一方でしょう。

4

というわけで、ウクライナ問題からではなくコロナ感染とワクチン後遺症から話し始めることに変更しました。

しかし「コロナ騒ぎ」と言っても何から話し始めるか。そして思いついたのがイベルメクチンでした。日本人で、しかもノーベル生理学・医学賞まで受けた医薬品で、そのうえその有効性が世界各地の医療現場で立証されていたからです。

にもかかわらず、日本政府は「安全性が立証されていない高価なワクチン」を外国から輸入することだけに熱心でした。

とはいえコロナ騒ぎの本質を分かりやすく示すには何が良いか、それを最も象徴的に示す事例は何かと、いろいろ考えたすえに、ふと思いついたのが、テス・ローリー博士でした。というのは、以前にも紹介しましたが、彼女は元WHOのコンサルタントであり、アメリ

カでFLCCC（コロナ緊急治療 最前線医師の会）という団体が立ち上げられていたのに呼応して、「英国イベルメクチン推奨開発協会」という団体を立ち上げていたからです。しかも彼女はインタビュー番組で次のように言っていたのです。

イベルメクチンがこのパンデミックのすべての秘密を解き明かす鍵だということです。

この番組は、前章でもふれたように、私の研究所が運営しているサイト『翻訳NEWS』を読んだ読者から紹介された次の動画インタビューによるものです。

* イベルメクチン排除の謎を解く Former W.H.O. Consultant Exposes Takedown Of Ivermectin
(元WHOコンサルタント、テス・ローリー博士がイベルメクチン排除の背景を暴露)
<https://www.nicovideo.jp/watch/sm40907967>（日本語字幕付き、約60分）

これを私のブログで紹介したところ、研究員のひとりから次のような感想が寄せられてきました。

「動画を見ました。すばらしい動画だと思いました。エビデンスをとことん大事にするテス・



ローリー医師の語り口に感銘を受けました。これを私のできる範囲で拡散しようと思います。私自身これからは繰り返し見たい気持ちです」

この感想は私も全く同感でした。そこで講演でもテス・ローリー博士の話から切り出したのですが、先述のように時間を削られたので十分に説明できませんでした。そこで以下では、講演で紹介できなかった点について、もう少し説明を加えたいと思います。

5

前章でも紹介しましたが、テス・ローリー博士はイベルメクチンに関する論文を手に入る限り全て読み尽くし、その有効性を確信しました。

そこで、WHOで「新型コロナウイルス」に関する部



アンドリュー・ヒル博士。最初はテス・ローリー博士と同じ意見だったのに最後は豹変したWHO顧問

門の顧問となっていたアンドリュー・ヒル博士に連絡を取り共同研究を始めました。そして結果としてヒル博士も同意見となりました。

つまりヒル博士も、「イベルメクチンがWHOで正式にEUA（緊急使用許可）として認められれば、新型コロナウイルスを世界から一掃できるし、危険なワクチンを使用する必要もなくなる」と確信したのです。

そこで、それを共同研究というかたちで論文にまとめてWHO文書として発表しようとなりました。ところが、いざ発表という最終段階になったとき、いつの間にか結論部分で「イベルメクチンはその効果が十分に検証されていない」という文に書き換えられ

ていました。

そこでローリー博士はヒル博士に連絡を取り、「突然あなたが、姿勢を変えたのはなぜか、その背後には何があったのか、あなたの姿勢を変えさせたのは誰か」を涙ながらに



訴えました。この場面は本当に感動的です。

彼女はヒル博士とズームで話していたので、その一部始終は動画として残されています。ヒル博士は心にやましいことがあったからでしょう、一貫してローリー博士から顔を背け、うつむき加減に、しどろもどろの返答を繰り返すだけでした。

彼女は「イベルメクチンが使えないために、世界で毎日どれだけのひとが死んでいるのか、あなたも知っているでしょう」と訴えたのに対して、ヒル博士は「そうだ毎日1万5000人が亡くなっている」と答えています。

にもかかわらずヒル博士は、「私に6週間の時間をくれ。そうすれば、あの結論部分を変えるよう努力する」と言いわけていました。

そこでローリー博士は「6週間×1万5000人、つまり63万人ものひ

とが命を失うのよ」と訴えたのですが、最終的にはイベルメクチンに肯定的評価を与えることはありませんでした。そして、それが現在にまで至っているのです。

6

テス・ローリー博士はヒル博士に、「どうしてあなたが夜眠れるのか分からない」と言っていました。この動画を見ると、彼女がそのような言わずにおれなかった気持ち。ヒシヒシと伝わってきます。

この54分の動画では、最終部分でヒル博士が豹変した理由が、ついに明かされています。それは次のとおりです。

(1) ヒル博士が、WHOの助言者として大きな力をもっていたUnivaidという国際医療機関に所属していたこと

(2) ヒル博士がイベルメクチンの評価結論を書く直前に、「ヒル博士の教授ポストがあるリパブル大学に、Univaidが4000万ドルという巨額の資金援助をする」という発表がおこなわれたこと

(3) WHOおよび国際医療機関Univaidの資金源の多くは、ビル・ゲイツ財団に依存して

